The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十三巻第二号　平成二十七年三月

戦時下アメリカにおける日蓮宗の展開

安中尚史

はじめに

日蓮宗の海外布教は明治二十年代以降から本格的な活動となったが、東アジアにおける日本の植民地政策に追随して展開したものと、ハワイやアメリカ合衆国本土（以下、アメリカ）における日本の移民活動を基盤にして展開したものに大別でき、そのどちらも彼の地に住む日本人を主たる布教の対象にしたものであった。

これまで、日蓮宗における海外布教の研究は、東アジアを中心に展開したものがわずかではあるが考察が進められている程度で、ハワイやアメリカで展開したものは、過去に記念誌的なものが発行され、その中から宗門・寺院・開教師・信徒等の活動をわずかながら読みとることが適うほどでしかなかった。筆者が研究の対象として取り上げる以前は殆ど考察されることはなく、日蓮宗史研究の中にあって特に研究が遅れている分野の一つである。(1)

そこで本稿は、太平洋戦時下におけるアメリカで展開した日蓮宗の活動について、ロサンゼルスの「日蓮宗米国別院」に残る開教師達が書き綴った日誌の記録を中心に、アメリカにおける日蓮宗の活動のはじまりもあわせて考察する。

ロサンゼルスにおける開教師と信徒の動向

まずはじめにアメリカにおける日蓮宗開教師と信徒の活動について、現在、カリフォルニア州ロサンゼルスにある日蓮宗米国別院に残る史料を主として、設立当初の様子を中心に考察をする。(2)

日蓮宗米国別院は、アメリカにおける日蓮宗寺院の中で最も古い歴史を有し、戦前期におけるその拠点として位置づけられていた。日本からの移民たちはアメリカ西海岸を中心に活動を展開し、この寺院も日本人・日系人の増加が要因となって創設されたが、その経緯等について知ることのできる史料として表紙に「大正三年六月　日蓮宗教会創立寄附」と

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

書かれたノートが残っている。

このノートに「日蓮宗教会創設趣意」として、当時のカリフォルニア州には約十万人の日本人・日系人が住み、そのうちに日蓮宗信徒も少なからず存在していたが、州内に日蓮宗寺院がないことから、信徒たちが遺憾な思いをもっていたことがわかる記述がある。さらに、この状況下で朝鮮在住の日蓮宗布教師であった旭寛成がロサンゼルスを訪問する機会があり、ロサンゼルス在住の日蓮宗信徒が寺院設立に向けて働きかけを行い、日蓮聖人の教えを誰もが皆で実践する道場を設け、日蓮聖人の大慈悲から建てられた願いに酬いなければならないとし、賛同者を求めていることも記されている。(3)

いっぽう、このノートには「寄附芳名録」が記され、三十名以上からの寄附金額や奉納品があったことが知られる。寄附の額については百二十ドルを最高に、また高額者は分割で納める記述もあり、さらにカーペットや花瓶など現金以外の物品も贈られている。

このほかに「日蓮宗北米開教史」とタイトルが付されたノートも存在し、一頁目に創設時の様子が記され、その内容をみると先の「日蓮宗教会創設趣意」と重複する記述も多いが、加えて旭寛成と最初に接触をした三名の信徒名や、旭を招いて宴会が開かれたことやその場所、同席した人物など、信徒たちの様子を具体的に知ることができ、以降は日付のある「日誌」となっている。(4)

この日誌のはじまりについては、大正三（一九一四）年五月二十三日からで、これによると仮教会所をロサンゼルス市内のホテル内に設けて教会設立のための集会が開かれ、開教の方策として大正三年四月九日に崩御した昭憲皇太后の大葬遙拝式を挙行し、多くの日蓮宗信徒の招集がはかられたことがわかる。(5)

その後、昭憲皇太后大葬遙拝式は五月二十六日に挙行され、約二十五名の参詣者を集め、併せて旭寛成によって説教が行われたことが記述されている。つまりは皇太后大葬遙拝式（皇太后陛下奉弔式）が教会設立に向けての本格的な活動のはじまりであって、次いで六月八日には、信徒の家で説教会が開かれ、役員や教会の場所、入仏式の実施や日程が決められた。なお、入仏式についての記録はなく、その内容は不明だが、六月二十五日から少しく遅れた七月十二日に発会式が盛大に執り行われ、その様子について、当時の日蓮宗の機関誌的な位置づけで発行されていた『日宗新報』（一二九八号・大正三年九月五日）に記載されている。これによると、日本人・日系人社会が注目する中で、日系新聞各社が取材した様子がわかり、そのうちの一社であった『南加時報』が報ずるところによると、信徒七十名・基金千八百ドル・当日の出席者が百五十名以上におよんだという。さらに式次第からは日

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

本人・日系人社会の各組織代表者から祝辞が寄せられたことがわかり、当日の盛況ぶりは現在の日蓮宗米国別院に残る記念写真からもうかがい知れる。

旭が北米アメリカに上陸した当初の様子について、『日宗新報』（一二九七号・大正三年四月十二日）によると、ハワイを経由してサンフランシスコから入国を果たしたことがわかる。当時のホノルルにはすでに日蓮宗寺院が置かれ、開教師が常駐して本格的な本堂建築に向けての準備が進められている時であった。旭が横浜を出帆してから意を決してサンフランシスコに上陸を果たし、その発展ぶりに驚きを隠せなかった様子である。日本領事館を訪問の後に、在留する日本人を訪ねている様子がうかがえるが、一時は知り合いが一切いないことから途方に暮れていたようである。山梨県人会長の萩原氏との出会いをきっかけに、熱心な日蓮宗信徒である二宮氏との縁が生まれ、その紹介で多くの信徒を訪ねることが適った。その宿縁を今後の開教事業に役立てるために、信徒組織の結成を望んでいた。

このような旭の行動を解く文書とは別に、旭の心情を知る文書も『日宗新報』に寄せられている。そこからは当時のサンフランシスコ、ひいてはアメリカにおける日本人の境遇を読みとることができる。これによるとアメリカに渡った日本人の活躍奮闘によって、大きな日本人社会の形成に至ったが、米国では差別を受けて理解されずに嫌悪され、排日活動が活発化している様子をうかがい知ることができる。さらに日本人がアメリカ社会で生き抜いていくために積極的に同化が進められ、信仰の面においても仏教徒が自己の身をたすける方便としてキリスト教に入信していることが記されている。また、アメリカでは日本仏教は本願寺派の独占状態であることから、日蓮宗の寺院が一つもないことを愁いて、青年教家たちの今後の行動に訴えている。

ロサンゼルスに在住する日蓮宗信徒は、旭寛成と出会ってから数日のうちに仮教会所をホテル内に設け、信徒集めのために皇太后大葬遙拝式を挙行し、さらに一カ月後には家を一軒借りて教会とし盛大に発会式を執り行ったことなどが、諸々の記録から知ることができた。このあまりにも急な信徒たちの行動は、旭の滞在する期間が訪問当初から限られていることを物語っているが、さらに信徒たちがすでに一定の準備を整えていたことが十分に予想できる。

いっぽう日本人を取り巻く環境が、日増しに厳しくなる中での出会いは、彼らにとって千載一遇の機会であったに違いない。時はあたかもカリフォルニア州における外国人の土地所有および三年以上の貸借の禁止を目的とした法律が、議会で承認された直後のことである。不安に包まれた日々の生活を強いられる中で、故郷で慣れ親しんだ信仰の導き手との出

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

会いが、彼らにどれほどの安心を与えたのかは想像に難くない。

その後の旭や信徒たちの行動については、「日誌」の中でユタ州へ向けて出発する日の「大正三年十月十四日　旭開教師ソートレーキ　ユタ洲ニ向ケ出発信徒一同ソートレキ停車場迄送別仝夜本教会々員相諮リ妙信講ヲ開ク」と、日本へ帰国するためにシアトルを出帆した日の「大正三年十二月一日　旭寛成氏シヤトル出帆帰朝ノ途ニ着カル」と記されるだけで、具体的な内容については管見の限りでは知ることができない。(6)

旭が帰国の途についてからおよそ四カ月後の大正四（一九一五）年四月、ロサンゼルスの信徒たちは、新たに北川智旭を開教師にむかえることとなった。さらに大正六（一九一七）年六月に第三代山下義静、大正九（一九二〇）年十二月に第四代遠山潮徳と続き、大正十二（一九二三）年一月に就任した第五代池田順教は昭和五（一九三〇）年に現在のロサンゼルス日蓮宗米国別院が建つ場所に移転した。当時、アメリカ市民以外は土地を購入することが適わなかったことから、ハワイ生まれの日系二世の信徒名義で土地を購入し、後に日蓮宗教会に変更したという。さらに昭和十一（一九三六）年八月に第六代沖原龍進が就任し、その後の昭和十五（一九四〇）年に「身延山米国別院」に昇格したが、昭和十六（一九四一）年三月に第七代石原慈禎が就任して間もなく日米開戦となり、アメリカ西海岸の日本人・日系人は強制的に立ち退きを命ぜられ別院も閉鎖された。

なお、各地の日蓮宗寺院設立等に関する展開については、次の年表に示すとおりである。

〈大正四年〉前日蓮宗管長で近代海外開教の祖とされる旭日苗師（八三歳）がロサンゼルスを訪問する。
〈大正五年〉シアトル在住信徒による「日蓮同心会」を基盤として、丘龍潮師がシアトル日蓮仏教会を創立する。
〈大正十一年〉鬼木泰教師がサンフランシスコ日蓮仏教会を創立する。
〈昭和四年〉シアトル日蓮仏教会（沖原龍進師）が現在地に会堂を新築する。
〈昭和五年〉沖原龍進師がポートランド日蓮仏教会を創立する。ロサンゼルス教会（池田順教師）が現在地に会堂を新築する。
〈昭和六年〉池田順教師がサクラメント教会を創立する。
〈昭和八年〉初代開教総長に池田順教師が就任し、ロサンゼルス教会は米国開教本部となる。
〈昭和九年〉ロサンゼルスで第一回米国日蓮宗開教師および信徒代表者会議を開催する。
〈昭和十年〉シアトルで第二回米国日蓮宗開教師および信

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

徒代表者会議を開催する。

〈昭和十二年〉サクラメントで第三回米国日蓮宗開教師および信徒代表者会議を開催する。

〈昭和十五年〉ロサンゼルス教会（沖原龍進師）は身延山久遠寺より「日蓮宗身延山米国別院」の称号を授与される。

〈昭和十六年〉太平洋戦争勃発により各教会は閉鎖される。(7)

各地収容所において日蓮信徒は信仰を保持する。

このように、ロサンゼルスの寺院設立以降、十七年間でアメリカ西海岸に四つの寺院が設立され、盛んな活動を展開していたことが理解できる。さらに、昭和八（一九三三）年以降は開教総長が任命され、開教本部が設けられていることから、組織的な活動へ変化している様子もうかがい知れる。

日米開戦と開教師の活動

昭和十六（一九四一）年十二月八日（アメリカでは七日）、日本軍のハワイ真珠湾攻撃によって、日本とアメリカが開戦となったことは周知のとおりである。欧米諸国のアジア進出と日本の大東亜共栄圏建設構想の摩擦によって、日本とアメリカの関係が悪化の一途をたどり、同年七月にアメリカ政府は対日資金凍結措置を断行し、さらに八月に対日石油輸出禁止令が出されるなど、相互の緊迫度が増しての結果であった。

ロサンゼルスの日蓮宗寺院に残されている史料のうち、大正十五（昭和元・一九二六）年から昭和十七（一九四二）年四月までの「日誌」には、開戦以前の日本とアメリカの関係悪化に関する記述については殆どみられず、昭和十六年七月二十九日に「資金凍結令施行セられ　日米国交雲底し」とある程度であった。すでに当時のロサンゼルスをはじめとしたアメリカ各地の日本人社会は、両国の関係について神経質になっていたこと当然であるから、敢えて記録の中に留めなかったのではないか。その後、開戦をむかえた十二月七日以降の記述は、直接的にも間接的にも戦争にかかわるものが多くなり、そこから開教師や信徒たちの蒙った苦難をうかがい知ることができる。

〈十二月七日〉本朝日本軍ハワイを襲撃　日米国交最悪の場合が来た　不安の第一日を送る

〈十二月十四日〉時局を鑑み当分朝参を休み

〈十二月十八日〉開教本部として沿岸各教会へ下の如く告達を発シ時局にそうべく、うながす。

（告達）本宗教会主任並信徒中

日米関係ハ最悪ノ状態ニ立チ至レリ此ノ際各地教会共主任及ビ幹部ハ勿論一般信徒ハ言行ヲ慎ミ最善を尽サレタクコト二世青年ニ対シテハ特ニ市民トシテ本分ヲ尽シ過リタル行為ナキヤウ指導シ万遺漏ナキコトヲ切望ス

我等ハ米国ノ恩恵ニ浴セルモノナルコトヲ心ニ明記シ協力以テ仏教徒トシテ至誠ヲ尽スベシ

１９４１年１２月１８日　在羅府　日蓮宗北米開教本部

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

〈十二月二十七日〉元朝会、朝参（一月四日より始）日校等別院行事　一般法要も従前通り行ふ様全信徒へ通知状発送す。

これは、先の「日誌」の記述（抜粋）であるが、開戦当日の様子や、その後の対応について、言行に慎みアメリカ市民としての本分を尽くし、特にアメリカに協力する姿勢を見せるように指示していることがわかる。さらに、年始からは従来通りの活動を実施することが信徒に伝えられた。しかし、年明け一月六日に「羅府村雲婦人会を解散」や、二月二十二日に「都合により朝参当分お休み」などの記述があることから、従来通りの活動ができる状況ではなかったようだ。

いっぽう、一月二十七日の記述に「倉橋師　法要其の他出張の為羅府郡下の旅行許可書をパーマ検事より下附」とあり、これは開教師の行動に対して制限が加えられていたことを意味する。また翌月から日本人・日系人の強制立ち退きがはじまり、信者もその対象となって苦慮する様子が次の記述からわかる。

〈二月二十日〉昨日各宗協議の結果倉橋師等（五名）タミナル島へ出張立退について救済部置く事をつぐ
〈二月二十七日〉倉橋師二宮氏案内にてウイルミングトン方面へ出張　立退にあたって教会を開放の示を伝ふ
〈三月四日〉各宗聯盟にて立退問題の相談あり石原監督出席
〈三月十日〉黒崎高次氏一家　明後十二日コロラード方面立退の為お別の参拝
〈三月十五日〉当別山納骨　明16日エバグリへ各宗合同一時預の為め午後二時よりお別の施餓鬼法要執行
〈三月二十三日〉オエンスバレーの先発隊第二班出発
〈四月四日〉タミナル住人　権野、松野、両家（和歌山県人）3月8日より本堂ダイニングルームを開放宿泊中なりしが本日オーエンス　マンザナへ（ママ）（収容所）へ行かる
〈四月十日〉参月頃より立退者の為め聖堂を開放荷物を預りしがほほ一ぱいにな（ママ）本日をもって一時〆切とす。
〈四月二十九日〉上町方面　明30日サンタニターへ立退　倉橋師信徒訪問

これによると各宗派が協力し合って立ち退き問題に対応していたことがわかる。また、立ち退かされた信徒に寺院の建物を開放して収容所[8]へ移動するまでの約一カ月間にわたって宿泊所として提供し、さらに荷物を預かるなどして便宜をはかっていたことが読みとれる。そして、四月二十九日の記述を最後に、この日誌はおわってしまった。なお、ロサンゼルスの開教師で開戦時の開教総長であった石原慈禎が、アリゾナ州ポストンの収容所で発行した『妙行聖典』という勤行のための経文、回向文、声明、日蓮遺文などを収めた四十四頁の冊子がシアトルの寺院に残されており、その巻末に「浄写之記」として収容所内の信仰生活を推し量ることができる記述が次のようにみられる。

浄写之記

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

○自由に経典が得られなかつた往時の状を現出して古をしのばしめた。
○求めてやまざる信人のために書写の浄行を積せてもらつた。
○師なくとも或程度の正しい読誦の出来得るようにと願ひ心から記号を付けた。
○関西の読法に従ふた。行人記号の如く読誦するやう心されたい。
○水の流るゝが如く不断に怠りなき信仰が願ひたい。

本化沙門大僧都　日邃　識

維　一九四三年五月十三日満願
浄写之比丘　日邃
仝　日法
三百五十部壱万枚印刷浄行
風間亀治
発行所　北米アリゾナ州ポストン
ポストン仏教寺院
Poston Buddhist Temple 45—14—B

この「浄写之記」に続いて書かれた奥書では、「浄写之比丘」として日邃（石原慈禎）と「日法」（倉橋智教もしくは青柳正法）の二人が収容所で活動していたことや、三百五十部を発行したことが知られる。

おわりに

ロサンゼルスの寺院以外で戦前期から設立していた寺院は先述のとおりシアトル、ポートランド、サクラメント、サンフランシスコであったが、サンフランシスコの寺院は現在その活動は休止され、継続しているのは五カ寺を数える。

シアトル、ポートランド、サクラメントの戦時下の様子については、各寺院に史料が残されていなかったり、調査中や未調査であることから詳らかにできてはおらず、今後の課題となる。なお、現在までに刊行されている出版物や聞き取り調査によって、シアトルの寺院では昭和十七（一九四二）年四月の寺院閉鎖にあたって、信徒が身の危険もかえりみずに建物の周囲に板張りをし、その保持につとめたことが伝えられている。また、ポートランドの開教師であった荒川要博はアイダホ州のミネドカにある強制収容所に信徒と一緒に入れられたが、そこで『日蓮宗聖典』(9)という勤行のための経文、回向文、声明、日蓮遺文などを収めた七十頁の冊子を発行した。その奥書に「維時一九四三年十二月八日満願　北米合衆国アイダホ州ミネドカ日蓮宗教会荒川要博合掌」と記されている。

このほかにも『日蓮宗聖典』や先に記した『妙行聖典』のような冊子が他の収容所で発行されていたのか、十カ所設けられた収容所の何カ所に日蓮宗の僧侶が在住していたのかなど、不明なことばかりである。当時のアメリカに在住する開教師は限られており、全ての収容所でポストンやミネドカと同じような活動が展開していたとは考えにくく、戦前の寺院

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

数より少なかったであろう。

終戦をむかえた昭和二十（一九四五）年から七十年近くを経た現在、収容所に入れられていた信徒たちも高齢となって、当時の様子を知る人たちが少なくなっている。機会がある毎に、収容所生活を経験した人たちから話を聞いているが、その信仰生活についての詳細を明らかにすることが困難な状態になっていることを痛感する。

1　拙稿「ハワイにおける日蓮宗の開教活動について」（『印度学仏教学研究』第五十二巻第二号、平成十六年）、拙稿「アメリカ日本人移民の日蓮宗信仰――移民の歴史とロサンゼルスにおける日蓮宗信徒・僧侶の活動を中心に――」（『日蓮教学研究所紀要』第三十七号、平成二十一年）など。

2　日蓮宗米国別院の歴史について著されている書籍等については、昭和四十五（一九七〇）年九月に執り行われた「本堂落成慶讃大法要」の記念写真帖（ロサンゼルス日蓮宗米国別院、昭和四十五年）、池田順康・堀教通共編『池田順教上人を偲ぶ 付日蓮宗北米教会略史』（池田順康、平成七年）、『創立９０周年記念アルバム 温故知新』（ロサンゼルス日蓮宗米国別院、平成十六年）がある。

3　「日蓮宗教会創立趣意」（「大正三年六月 日蓮宗教会創立寄附」所収）一頁。

4　「日蓮宗北米開教史及日誌」（「日蓮宗北米開教史」所収）一頁。

5　「日蓮宗北米開教史及日誌」（「日蓮宗北米開教史」所収）二頁。

6　「日蓮宗北米開教史及日誌」（「日蓮宗北米開教史」所収）四頁。

7　『日蓮宗北米開教百年史』日蓮宗北米開教庁編、二〇一四年。

8　昭和十七（一九四二）年二月から約十二万人の日系アメリカ人・日本人移民が強制的に立ち退きを命令され、十カ所の収容所と一カ所の拘置所に入れられることとなった。なお、収容所の建設が間に合わなかったことから、一時的に十六カ所の「集結センター」（体育館や競馬場の厩舎などを利用）に収容された。

9　『日蓮宗聖典』は『妙行聖典』と同じくシアトル日蓮仏教会が所蔵する。なお『日蓮宗聖典』の再版本をカリフォルニア州サンノゼの妙覚寺別院が所蔵し、奥書に「一九四三年十二月十二日二百五十部印刷」「一九四四年二月十六日二百五十部再刷」とあることから、再版までに六百部を印刷したことがわかる。

〈キーワード〉 海外開教、太平洋戦争、アメリカ、日蓮宗

（立正大学教授・博士（文学））

NII-Electronic Library Service